

佐藤ミツとは何者か？

仙台教会の歴史シリーズ その 19

小林孝男

1. 宣教師と「教師兼協力者」

宣教師は派遣された国での働きを本格的に行うにあたり、まずはその国においてその国の言葉を習得するための集中的な学習を、2年間ほど行います。それを修了してから具体的な働き場所へ派遣されるわけです。グラント宣教師の場合も勿論そうでした。1950年に来日してから2年間の語学研修を経て、1952年に仙台に派遣され、開拓伝道に着手することになります。

2年間日本語の語学研修を受けたとはいえ、日本語での説教は大変です。原稿なしで流暢な日本語で説教をする宣教師もいますが、そこまでになるためには語学センスと共に、長年にわたる経験が必要です。最初の段階では、当然ですが、片言の日本語での説教しかできません。聞き手は忍耐と愛をもって聞き取ろうとします。しかし、日本語として全く意味が通じない内容であれば、聞き手がどんなに努力してもどうしようもありません。そのようなことが起こらないように、宣教団は宣教師が独自に「教師兼協力者」を雇うことを認めていました。その費用は必要経費となるのでしょう。「教師」という面でいえば、何よりも日本語の教師として、宣教師が日本語の説教原稿を書くのを手伝ったり、出来上がった原稿をチェックしたり、読み方や発音を指導したりする役割です。「協力者」という面で言えば、様々なところでの出番が待っていたはずで、日本とアメリカでは文化も習慣やマナーも異なります。日本の流儀を身に着けないと、相手とのコミュニケーションがスムーズにとれなかったり、相手に不快な思いをさせてしまったりということになりかねません。そのようなことにならないように「協力者」がお手伝いするわけです。また社会のシステムも日本独特のことがありますし、役所に何か書類を提出するにしても、外国人にはなかなか勝手が分からないでしょう。そのような時も「協力者」の出番となります。

2. グラント宣教師の教師兼協力者

グラント宣教師も教師兼協力者を雇っていました。「佐藤ミツ」という方です。師は佐藤ミツの働きについて次のように語っています¹。

「佐藤さんは当時、私の説教の準備という重要任務を手伝い、優秀な言葉の先生だった。しかし、彼女はそれにとどまらず、業務上の交渉においてしばしば仲介人となり、キリスト教幼稚園における豊かな経験を背景に、この新しい働きを行う上で大切な支援を数多くしてくださった。彼女は若く経験が少ない教師の相談相手となり、キャサリンが指導要綱を作成する手伝いをし、毎月の保護者会や家庭訪問を手伝った。彼女の手伝いがなければ、幼稚園は実在することがなかったかもしれないし、少なくともあれ程短い期間にあれ程成功することはなかっただろう。—中略—佐藤さんのようにキリストに忠実に従う者は、何回も敵対心と相まみえ、それをはねのけ、私たちの弱く、内気な信仰に刺激と挑戦を与えてくれた」。

3. 佐藤ミツとは何者か

佐藤ミツがどのような人物なのか、グラント宣教師の著書から分かることは、戦後、満州から着の身着のまま送還されたこと、満州では約 20 年ミッション病院に夫と共に勤務していたこと²、本人も夫もクリスチャンで子供がいたこと、幼稚園教諭として豊かな経験を持っていたことなどです。

これだけの情報からですが、大雑把な人物像を次のように描いてみました。在仙の宣教師のもとで働くということは、少なくとも仙台にゆかりがある人物で、一定程度の教育を受け、キリスト教や聖書に関しても豊かな知識を持つ人物。と言うことは、もしかしたら仙台のミッションスクールの卒業生かもしれないと考え、あてずっぽうでしたが、まずは手元にあった『尚絅女学院 100 年史』の人名索引で「佐藤ミツ」を調べました。すると一カ所にその名前が出ているではありませんか。その方は尚絅女学校本科 18 回卒業生でした。勿論それだけでは、彼女がグラント宣教師に仕えた教師兼協力者であったかどうかは特定できません。「これが同一人物であれば、尚絅と仙台教会の両方に関わっている私としては、嬉しいのだがなあ」という思いが高まり、尚絅学院同窓会事務室で、同窓会誌『むつみのくさり』³のバックナンバーを調べ、この同窓生についての情報を集めました。その結果、次のことが判明しました。

(1)第 18 回卒業生（1916 年・大正 5 年卒業）の中に、「相墨みつ」という人物がいたこと⁴。この時期の校長は A.ブゼル宣教師

(2)相墨みつの実家は岩手県遠野町石倉通であったこと⁵

(3)相墨光子 (ママ) は 1918 年 (大正 7) 頃は、仙台にあった聖公会系の青葉女学院保母養成所で学んでいること⁶

(4)相墨光子 (ママ) は 1923 年 (大正 12) 頃は、東京の本郷駒込に居住していたこと⁷

(5)相墨みつは 1924 年 (大正 13) に佐藤三郎と結婚したこと⁸

(6) (相墨) 佐藤ミツは 1925 (大正 14) 頃は、満州奉天淀町に居住していたこと⁹

(7)佐藤光子 (ママ) には二人の子供がいたこと (1928 年・昭和 3 年当時) ¹⁰

同窓会誌から得られたこれらの情報により、尚綱の卒業生・佐藤ミツ¹¹とグラント宣教師の教師兼協力者・佐藤ミツは、同一人物であると考えていいのではないかと結論付けました。

グラント宣教師が来仙して最初の 1 カ月は、尚綱女学院 (当時) で働いていた二人のアメリカン・バプテストの宣教師のご厚意で、その宣教師館にグラント家族 4 名がお世話になりました。また、師の説教準備や幼稚園の立ち上げや運営に関して、アメリカン・バプテストの宣教師が設立した尚綱女学校 (当時) の卒業生が、教師兼協力者として重要な役割を果たしました。更に、仙台教会設立メンバーであり、幼稚園設置の時から教諭を務めた三浦栄子さんも、また同じく設立メンバーで初代の婦人会長として貢献した莊子聡子さんも、日本バプテスト同盟から転会された方々でした。

これらのことを踏まえて多少大げさに表現すれば、南部バプテストとアメリカン・バプテストの仙台における具体的な協力と支援の働きによって、仙台教会の今があるのだ、と言っているでしょう。

¹『主の息吹の中で』89~91 頁

²現在のところ資料がなく正確なことは不明。病院や幼稚園や職業訓練所などを併設するキリスト教主義の福祉事業体の、幼稚園部門で働いていたという可能性はないだろうか。そうであるなら、グラント師が佐藤について「キリスト教幼稚園における豊かな経験」と評することにも矛盾しないのだが。

³尚綱女学校同窓会の機関雑誌として、1907 年 (明治 40) に創刊

⁴資料 (1917/12/28_むつみのくさり 10 号) 18 回卒業生集合写真

⁵資料 (1917/12/28_むつみのくさり 10 号) 85 頁

⁶資料 (1918/11/24_むつみのくさり 11 号) 17 頁

また、資料 (年代不詳_明治・大正期におけるキリスト教主義保育者養成) で、著者 (志賀智江) は青葉女学院保母養成所について以下のように紹介している。

「当初日本聖公会の婦人伝道師養成の目的で明治 32 年に仙台にできたものであるが、大正 2 年に『青葉女学院』と改称して保母養成部を併設している。その教育目的は、『幼稚園保母及び将来児童を指導すべき者を養成するをもって目的となし更に幼稚園伝道事業のために特に訓練をなすものとす。』とあり、幼稚園を通した聖公会の宣教の熱意をはっきり打ち出したものである」。なお同校は 1947 年(昭和 16)に廃校

⁷ 資料(1923/02/15_むつみのくさり 14 号) 112 頁

⁸ 資料(1925/08/08_むつみのくさり 16 号) 120 頁

⁹ 資料(1925/08/08_むつみのくさり 16 号) 127 頁

¹⁰ 資料(1928/07/09_むつみのくさり 19 号) 37 頁

¹¹ 『むつみのくさり』では、号数によって佐藤(相墨)の名前が、「みつ」であったり「ミツ」や「光子」であったりと様々に表現がされているが、内容的には明らかに同じ卒業生のことを指す名前として使われている。どれが本名でどれが通称かは判断が付かない。